

# 『懐風藻』 山林隱逸詩から『古今集』「山里」歌へ

田 云明

キーワード 山林隱逸詩、山里、文学空間、古今集、歌詩交流

## はじめに

日本における「山」に対するイメージ及びその変容は、山を素材とした数多くの和歌表現、歌語の変遷などから読みとれる。笹川博司は『深山の思想—平安和歌論考—』<sup>1</sup>の一節「『み山』と『深山』」で、畏敬の対象とされた「み山」と、仏教的なニュアンスの強い「深山」という本来別々の二語が、院政期に一つの語として重なっていく過程について、『古今和歌集』を中心に表記史的に考察し、それが「山」に対する宗教的自然観の変容による古代和歌から中世和歌へという和歌の質的変容を示す一つの現象だと指摘している。用語表記の変化を宗教的自然観の変容という視点を持ち込むことによって解明するのは有意義な方法であるが、笹川氏の言う「宗教的」とは、ほとんど仏教を指している。

『万葉集』には無く、『古今集』に多くの用例が見られる「山里」という言葉も、「山」に対するイメージの一つの転換点であると言えよう。家永三郎は「山里の生活に対する憧憬」の理由について、「飛鳥時代以来の伝統的自然愛及びこれを反極的に強化した処の中古以降の厭世的思潮を内的契機として、支那思想、仏教思想の二の外来思想を外来的契機として成長したものである」<sup>2</sup>と指摘している。しかし、『古今集』「山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば」（冬・315）と詠まれたように、まだ憂き世を遁れる場として認められない「山里」について、十分に検討されていない。また、小島孝之は「『山里』の系譜」<sup>3</sup>で、「山里」と「都」との対照関係、及び「山里」の『古今集』において「寂寥・孤独の地、世の憂き時の逃避先」から『拾遺集』以降「閑寂な好ましい美的世界」へのイメージ変化について、それぞれ『懐風藻』『文華秀麗集』などの漢詩文、白楽天の閑適詩の影響を指摘している。しかし、『古今集』成立時、白楽天の閑適詩などに詠まれた山居の喜びや心の安らぎがすでに『菅家文章』など同時代の漢詩文には表れているにも関わらず、『古今集』における「山里」は「寂寥・孤独の地」としか捉えられていないことについて

は、論及されていない。

以上の先行研究によって分かるように、「山里」歌が成立した当初の作品である『古今集』についての検討はまだ不十分である。「山里」は中国文学・思想と仏教思想に起因するものであると先行研究は認め、「山里」と「都」との対照関係が前代の漢詩文につながっていることを指摘しているものの、『古今集』「山里」歌と漢詩文の隔たりについてはまだ詳しく論及されていない。「山里」の観念が成立した万葉から古今までの間は、漢詩文の伝来と隆盛、歌詩交流が盛んになった時期なので、漢詩文の働きがきわめて重要だろうと考えられる。本稿は、中国山林隱逸詩<sup>4</sup>という外来文学表現の受容という視点から、『懷風藻』から『古今集』までの漢詩文、和歌に詠まれた「山」、「都」、「里」、「世中」などの文学空間についての考察によって、時代ごとに山林隱逸詩表現の浸透度の差異を分析し、「山」へのイメージの変化を把握し、さらに、『古今集』における「山里」という文学表現の形成と山林隱逸詩の関わり、及び「山里」歌の表現特色と山林隱逸詩の相違を究明する。

## 一、中国文学の「山林」隱逸空間及び日本上代文学への影響

### 1、中国山林隱逸詩の表現特色と『懷風藻』の観念的山林隱逸詩

「山林」は隱逸空間として、はやくも『莊子』外篇「刻意第十五」に登場している。

刻意尚行、離世異俗、高論怨誹、為亢而已矣。此山谷之士、非世之人、枯槁赴淵者之所好也。（下線筆者、以下同様）

「山谷之士」とは、世の無道や自身の不遇を恨んで世を離れ、その身がおちぶれながらも、なお自分の高潔さを保つために、山谷に入った者である。「山谷之士」に似た表現「江海山林之士」が『莊子』外篇「天道第十三」に見られるように、この時期、「山林」は隱逸空間の一つとして定型化される傾向が見える。隱逸思想が盛んになった魏晋南北朝において、この傾向がもっと顕著に現われてくる。日本上代の文人に愛読された『文選』<sup>5</sup>、『芸文類聚』<sup>6</sup>「隱逸」を繙くと、「京華遊俠窟 山林隱遯棲」（『文選』「遊仙詩七首」第一首、郭景純）、「隱士托山林 遁世以保真」（晋張華招隱詩、『芸文類聚』「隱逸」）など、山林隱逸の詩句が散見する。ここで注目されるのが、「山林」という言葉が常に「京華」「世」といった「世俗」を表す語と対照させて詠み込まれていることであ

る。しかも、ただ語が並存するだけではなく、「朱門何足榮 未若託蓬萊」（郭景純前掲詩）というように、作者らは「世俗」の否定、「山林」の称揚という価値判断を明白に述べている。自然そのままで客観的に存在する「山林」を「世俗」と対照的に捉えることによって、「山林」が文学空間として再構築されるのである。この「世俗」と「山林」との止揚が、中国山林隱逸詩の表現特色と言えよう。

中国六朝・初唐の詩風にならった日本現存最古の漢詩集『懷風藻』<sup>7</sup>では、「烟霧辭塵俗。山川壯處居」（「獨坐山中」109隱士民黑人）、「物外囂塵遠。山中幽隱親」（「奉和藤太政佳野之作」119葛井広成）など、「世俗」と「山林」との止揚という中国山林隱逸詩の表現特色が受け継がれた。山水愛好の趣向が集中的に表れているのは「遊吉野川」（92）という詩であろう。

#### 「遊吉野川」

芝蕙蘭蓀澤。松柏桂椿岑。	芝蕙蘭蓀の澤、松柏桂椿の岑。
野客初披薜。朝隱暫投簪。	野客初めて薜を披り、朝隱暫く簪を投ぐ。
忘筌陸機海。飛繳張衡林。	筌を忘る陸機が海、繳を飛ばす張衡が林。
清風入阮嘯。流水韻嵇琴。	清風阮嘯に入り、流水嵇琴に韻く。
天高槎路遠。河廻桃源深。	天高くして槎路遠く、河廻りて桃源深し。
山中明月夜。自得幽居心。	山中明月の夜、自らに得たり幽居の心。

この一首は遣唐副使として入唐した経験のある藤原宇合の吉野詩である。「朝隱暫投簪」と詠んだところから、仕官しながらも精神的には隱逸の気分を抱くという妥協的な隱逸思想をいち早く受け入れた作者の官僚的な性格がよくうかがえる。また中国隱逸の代表である阮籍、嵇康の名を借りて自分の隱逸志向を表し、風雅な隱逸生活を想像しながら詠んでいる。そして「桃源深」、「幽居心」などで、吉野の山中における世俗を離れた奥深い静かな住まいでの心境を述べている。しかし、ありのままの風景が見えず、詩人の幻想によって詠まれた理想郷だけが映っている。吉野はもともと離宮があり、しばしば天皇が行幸し、官人が遊覧した地であり、決して山深く、都から遠ざかった所ではないものの、詩材になると、俗世を離れた静寂で奥深い神仙・隱者の住居のようになぞらえられる。真に山林に入って隱逸するのではなく、遊覧の場を隱逸の場に見立てることによって、隱逸の気分を観念的に感じて詠じるのである。

これに対し、入山修行する僧侶の「山」詩はどうであろうか。釋智蔵の「秋日言志」を見てみよう。初句「欲知得性所。來尋仁智情」に書かれたように、作者は心の安らぎを求めるために、山水の風情を尋ねに来たのである。結句「因

茲竹林友。榮辱莫相驚」は竹林七賢の友のおかげで、「榮辱」といった世俗の価値観に紛れることがないと、この詩の主題を表している。ここには、西晋竹林七賢の山水愛好の影響が見られる。『老子』「厭恥章」による末句や、竹林七賢を同志に比する考えを見るに、作者が仏教僧でありながらも、老荘へ強い関心を示していることが分かる。仏教僧の詩作でさえ、仏理を唱えることなく、ひたすら山林の風景を楽しむことから、山林隠逸が風尚のものとしていかに流行したかがうかがわれる。

## 2、『万葉集』に詠まれた「山」―「里」と対照的に捉えた異界的存在

「世俗」からの通れ先「山林」という隠逸的文学空間が『懐風藻』で確認できるが、同時代の和歌世界ではいかがであろうか。次に、日本上代文学の韻文を代表する一大歌集『万葉集』に詠まれる多くの「山」と「世の中」・「都」・「里」など文学空間の関連から、上代日本人の「山」に対する認識を見てみよう。『万葉集』の「山」のイメージについて、金星和歌子は「万葉集の『山』」<sup>8</sup>で、「山」の語が表出する歌の用例の抽出・整理・分析を行い、表現論的立場から検討し、『万葉集』の「山」の表現の特色を「眺めるものとしての山」、「越える山」、「死者を葬る山」、「動物の声を聞く山」とまとめた。

まず、『万葉集』に詠まれた「山」という空間を確認しよう。『万葉集』に頻出する「み山」、「山高み」から、当時の人々の神の住む世界である「山」に対する畏敬の念がうかがえる<sup>9</sup>。また、「山邊を指して くれくれと 隠りましぬれ」(460)、「山道を 指して 入日なす 隠りにしかば」(466)などでは、「山」は死の場や墓所など、他界とかかわりの深い場所として捉えられている。さらに、「ひさかたの雨の降る日をただ獨り山邊にをればいぶせかりけり」(769)のように、「山」は寂しい場所と詠まれている。つまり、「山」は人間の日常住む場から遠い存在であった。それはしばしば「山」と共起する「里」の歌、「わが背子と二人し居れば山高み里には月は照らずともよし」(1039)、「山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住よし」(1047)、「霞立つ春日の里の梅の花 山の下風に散りこすなゆめ」(1437)などからも読みとれる。「山」は人間の住む場所と隔たり、季節的ずれのある空間として、人間の住む「里」と対照的に捉えている。一方、万葉歌人の中には、同時に『懐風藻』の詩人でもある場合があり、詩と歌の交流があったことは推定できよう。とくに、『万葉集』第三期(奈良遷都から天平五年まで)になると、山上憶良や大伴旅人の歌に、漢詩文の影響が次第に顕著になり、「漢文序+歌」という詩と歌の典型的な交流形式が現れる。例えば、大伴旅人「謹状」(810)の漢文詞書「長帯烟霞、逍遙山川之阿」が『文選』「秋興賦」の「逍遙乎山川之阿」を踏まえていることは明

らかである。山川に逍遙し、山水を楽しむといった、漢詩文に基づいて描かれた「山」のイメージは、死を連想させる墳墓として描かれた「山」とは、別世界のようなものである。また、「忍壁皇子に獻る歌一首、仙人の形を詠む とこしへに夏冬行けや裘扇放たず山に住む人」(1682)など、「山に住む人」は『遊仙窟』に描かれた「仙人」像を連想させる。ところが、「山」を仙境化する神仙思想の影響が確認できるものの、この仙境は「世俗」への否定から詠まれたものではない。『万葉集』において、人間の住まない場所としての「山」と人間の住む場所としての「里」の対応があっても、「山林」を「世俗」からの遁れ先として対照的に捉える山林隱逸詩のような歌は見当たらない。同じく「山」を人間の日常世界から離れた空間として詠む場合でも、和歌では異界的存在として、漢詩では隱遁先として詠まれている。

さて、『万葉集』に詠まれた「世の中」はどんな空間であろうか。「世の中は数なきもの」(3973)、「世の中の常しなれば」(3969)など、「世の中」が無常の主体となった歌は多く見られる。例えば、自身の死を予感した家持の作「世間は数なきものか春花の散りの亂ひに死ぬべき思へば」(3963)、さらには卷八に載せられている「世間も常にしあらねば屋戸にある櫻の花の散れる頃かも」(1459)のごとく、老いと死のみならず、花が散り、露が消える自然現象の移ろいも、男女の仲も、都が遷るのも、みな無常の相として受けとめている。以上に見るように、『万葉集』に見える「世の中」はほとんど仏教の無常観に基づいて詠まれた空間である。『万葉集』における「世の中」とは、「世俗」を含む人間の生きているこの世すべてを指す、広い意味を持つ言葉である。これは『莊子』の「離世異俗」、『懷風藻』の「塵俗」などと同次元の言葉ではない。この世のさまざまな変化から無常を読みとる万葉人にとって、無常な「世の中」に対する手立ては、絶望の嘆きとあきらめより外には見られない。一方、俗世間を離れようとする山林隱逸詩の作者らは、この世の全てを否定するのではなく、「山林」を「世俗」と対照的な文学空間として構築し、そこに救いを求めたのである。

なぜこの時期に「世の中」を離れ「山」に遁れる歌が現れなかったか、いくつかの理由が考えられる。一つは、当時の人にとって「山」は、まだ人間の日常からかなり隔たりがある異界的な存在、畏敬の対象だったということである。人間の住まない場所としての「山」は「世俗」よりむしろ人間の住む「里」と対照的に捉えられていると言えよう。もう一つは、ある外来思想・文学表現が伝わってきて、本土の文学に受け入れるまで、一定の時間が必要であったということである。中国の山林隱逸詩が日本に伝来したとき、漢語という外国語で書かれた『懷風藻』では直ちに模倣できたものの、和歌という日本固有の文学

である『万葉集』では影が薄いのは当然である。『懷風藻』に山林隱逸詩を残した藤原宇合、葛井広成が『万葉集』に詠んだのがほとんど恋歌であることがその好例である。『懷風藻』においては、「山林」という詩語がすでに「世俗」の対照的概念として定型化されているが、『万葉集』では「山林」に相当する歌語がまだ登場していない。最後に、当時、仏教の無常観が広がったが、私渡僧及び僧侶の山林修行が『僧尼令』によって禁じられたため、普及するには至らなかったと思われる<sup>10</sup>。和歌に「世の中」を離れて「山」に通れる歌の現われは、歌詩交流と仏教思想が盛んになる平安時代まで待たなければならない。

## 二、平安前期山林隱逸詩の分化

『懷風藻』においては、皇子から貴族まで、僧侶でさえ、一斉に山林隱逸詩を詠み始めたが、中国の山林隱逸詩の受容はまだ表現の借用にとどまっている。平安時代に入ると、山林隱逸詩の浸透が次第に深まり、詠み手の身分、階層による「山林」詩表現の分化が見られた。

### 1、「吏隱」の場とされる王臣貴族の「山林」詩

嵯峨天皇の即位により、王朝が唐風一色に変えられ、文学のほうも唐風文化の影響を強く受け、国風暗黒時代、即ち漢文学最盛期が訪れた。日本文学史上最初で最後の三大勅撰漢詩集が、わずか十数年（814～827）の間に作られた。勅撰三集の序文「魏文帝有曰。文章者經国之大業。不朽之盛事」(『凌雲集』序)、「天尊地卑。君唱臣和」(『文華秀麗集』序)、「魏文典論之智。經国而無窮。是知文之時義大矣哉」(『經国集』序)に見られるように、文章經国思想が盛んになり、文学が政治と密接にかかわるようになった。主に六朝詩風の影響を強く受けた『懷風藻』時代と違い、平安初期には、初唐について盛唐・中唐の漢籍の日本伝来によって、詩壇に新風が吹き込まれた。特に、官僚生活と隱逸生活の両立を唱える「登臨不外俗。吏隱兩相兼」(『凌雲集』「秋日於友人山莊興飲採得簷字」桑原腹赤)、「既自公而暢俗。亦退私而尋真。高臥吏隱之際。幽居道德之隣」(『經国集』「和石上卿小山賦」賀陽豊年)など「吏隱兼得」の詩文が、数多くの官僚詩人の共鳴を呼んだ。「吏隱」とは官吏と隱者、つまり官に居ながら、なお官界と距離を持って、自身の高潔さを保つ隱逸生活を尚ぶものである。用例として盛唐孫逖「登越州城」の「代闕英靈尽、人間吏隱并」が指摘されている<sup>11</sup>。中唐白詩にも「何如兼吏隱、復得事躋攀」といったより近い表現が見えるが、影響關係の有無については更なる検証が必要であろう。「登臨不

外俗」と称されたように、山水を楽しむ目的は俗世間を離れるわけではなく、公・私、吏・隠の間に調和を求めるためである。山水の役割が「吏隠兼得」の手段となり、しかも、身近にある山荘に取って代わってしまったのは、いかにも官僚的な性格の表われである。

身近にある別荘などを自然風景に見立てるという発想は『文華秀麗集』嵯峨天皇の「春日嵯峨山院」(2)にも見える。

「春日嵯峨山院」

氣序如今春欲老。	氣序如今春老いむとし、
嵯峨山院暖光遲。	嵯峨山院暖光遅し。
峯雲不覺侵梁棟。	峯雲不覺かに梁棟を侵し、
溪水尋常對簾帷。	溪水尋常に簾帷に對かふ。
莓苔踏破經年髮。	莓苔踏破す年を経し髮、
楊柳未懸伸月眉。	楊柳未だ懸けず月を伸ぶる眉。
此地幽閑人事少。	此の地幽閑にして人事少らなり、
唯餘風動暮猿悲。	唯餘すは風動ぎて暮猿悲しぶのみ。

この「嵯峨山院」とは嵯峨天皇の別荘（離宮）を指す。「此地幽閑人事少」と詠まれているように、閑静な「山院」は繁瑣な政務が行われる宮廷とは対照的に捉えられている。陶淵明の「辛丑歳七月赴假還江陵夜行塗口」（『陶淵明全集』巻第二）で「閑居三十載、遂與塵事冥。詩書敦宿好、林園無世情」と詠まれた「林園」の趣向と似かよっている。身近な別荘を観念的な自然風景に見立てることによって、しばらく「人事」つまり煩わしい政治的日常の場である宮廷ないし都を忘れることを意図している。こういう「山水」と「都」とを対照的に捉える視点は、「世俗」と「山林」を止揚する山林隱逸詩の表現特色に相通ずるものであり、後世の文学にも大きな影響を与えたのである。ところが、陶淵明の閑居は人里離れた静かな所ではなく、身近な「田園」である。「帰去來辭」に「僮僕歡迎、稚子候門」、「悦親戚之情話」と描かれるのは、家族や親戚との暖かい人間的交流が溢れている場所である。そこに、見立てが要らない。一方、嵯峨天皇の別荘は季節的ずれのある、人里離れた所として詠まれており、「暮猿悲」のように、静寂でもの悲しい場所に見立てて描かれている。

## 2、仏教修行・穢土を通れる場とされる空海の「山林」詩

勅撰漢詩集の二番目の『文華秀麗集』に、「梵門」の部立が現われてきた。『文選』には見えないこの部立が設けられた理由について、小島憲之が『文華秀麗

集』の解説で、「これは恐らく平安朝に入って、最澄・空海の如き仏家が現われ、仏教思想の横溢するようになったのも原因の一つではあろうが、当時伝来した多くの唐代詩集にかなり多くの仏教関係の詩を取めることに準じて設けたのも大きな原因であろう」<sup>12</sup>と述べている。「幽栖東岳上。禪坐對林巒」（『文華秀麗集』「和光法師遊東山之作」72）、「幽情獨臥秋山裏。覺後恭聞五夜鐘」（『經国集』「寄淨公山房」41）など、山中が修行の場として詠まれた詩句は多く見られる。都に住む貴族官僚にとっては遊覧、休養の非日常的な場である「山」は、山寺に住む僧侶にとっては修行、精進の日常的な場である。彼らこそ、山に住む楽しさと寂しさを最も鋭敏に体得した人たちであろう。

中でも、異彩を放つのは空海の『性靈集』巻第一に収められた「遊山慕仙詩」及び良岑安世に宛てた「入山興」（『經国集』62にも見える）、「山中何有樂」など一連の詩作である。空海は「遊山慕仙詩」序で『文選』の何敬宗・郭景純の遊仙詩について、次のように批評している。

昔。何生郭氏。賦志遊仙。格律高奇。藻鳳宏逸。然而。空談牛躅。未說大方。余披閱之次見斯篇章吟詠再三。惜義理之未盡。遂乃。抽筆染素指大仙之窟房。兼。悲煩擾於俗塵。比無常於景物。

漢詩文の權威的存在である『文選』を批判的に捉える空海の態度は、それまで『文選』の章句を相競い模倣してきた官僚文人の態度とは大いに違うと言えよう。それは仏教の立場に立つ空海が、仏教思想に基づく大仙界が神仙思想に基づく小仙界より優位であることを主張したいところに由来する。そして、空海の「山」詩の特徴は何と言っても「悲煩擾於俗塵。比無常於景物」と述べたように、仏教の無常思想の導入にある。例えば、「問師何意入深寒。深岳崎嶇太不安」という良岑安世の質問に対し、空海が高野山に入る理由を述べた「入山興」では、次のように詠んでいる。

問師何意入深寒。深嶽崎嶇太不安。上也苦。下時難。山神木魅是為羶。君不見。君不見。京城御苑桃李紅。灼灼紛紛顏色同。一開雨。一散風。飄上飄下落園中。春女羣來一手折。春鶯翔集喙飛空。君不見。君不見。王城城裏神泉水。一沸一流速相似。前沸後流幾許千。流之流之入深淵。不入深淵轉去。何日何時更竭矣。君不見。君不見。九州八島無量人。自古今來無常身。堯舜禹湯與桀紂。八元十亂將五臣。西嬖媼母支離體。誰能保得萬年春。貴人賤人總死去。死去死去作灰塵。歌堂舞閣野狐里。如夢如泡電影賓。君知否。君知否。人如此。汝何長。朝夕思堪斷腸。汝日西山半死士。汝年



過半若尸起。住也住也一無益。行矣行矣不須止。去來去來大空師。莫住莫住乳海子。南山松石看不厭。南岳清流憐不已。莫慢浮華名利毒。莫燒三界火宅裏。斗藪早入法身里。

まず、「京城御苑桃李紅」、「王城城裏神泉水」つまり都にある花と川の二例を挙げて、世の中のはかなさ、無常を実証する。次に、「九州八島無量人。自古今來無常身」といって、主に中国の歴史的人物を列挙し、老死をまぬかれ得ないという人間の無常を説く。最後に、「南山松石看不厭。南岳清流憐不已」と詠じて詩題に呼応し、世の無常から遁れ、山水風景を觀賞するという山に入る楽しさを述べ、出家の勧めで詩を結ぶ。都を代表とする世の中のはかなさを述べる前半と、山中に居る楽しさを述べる後半とは、対照的な構成となっている。「秋日言志」など『懷風藻』に見える僧侶の「山」詩に比べると、空海の「山」詩はただ六朝の山水隱逸の詩風を模倣することにとどまらず、無常を唱える仏教思想と山水を楽しむ隱逸思想が同時に詠まれるのが、その特徴と言える。全詩は「君不見」の繰返して独特なリズムを作り出し、迫力をもって「人如此汝何長。朝夕思々堪斷腸。汝日西山半死士。汝年過半若尸起」と、一刻も早く世俗つまり穢土を離れ、「山」に入ることを唱導している。もちろん、この「山」は他でもなく高野山を指し、真言宗の開創当初における、空海の政治的判断がこめられている。これこそ空海が「山」詩を作る動機である。要するに、空海は「入山興」において、この世のあらゆるものの無常を論じ、「浮華名利」に溢れた「三界火宅」のような「俗塵」を「一無益」と全否定している。このような「俗塵」と対峙する空間として空海は「山」を挙げて、「入山」を唱導している。この「入山」は「入法身」つまり仏門に入ることを意味している。また、「山中何有樂」の「潤水一杯朝支命。山霞一咽夕谷神。懸蘿細草堪覆體。荊葉杉皮是我茵」といったように、「山林」を仏教修行の最適地として描かれている。これは『懷風藻』における遊覧の場を隱逸の場に見立てる遊覧詩の「山林」描写とも、勅撰三集に詠まれた「吏隱兼得」の手段とされる山林の役割とも違う。

空海「山」詩では、「世俗」が穢土視され、「山林」が浄土へ行くための修行の場と捉えられる。これはただ山林隱逸詩の表現借用にとどまらず、仏教思想を導入するために山林隱逸詩を再構築したのである。政治的日常からしばらく離れ、山水を楽しむ官僚貴族の「山」詩に比べて、山林修行の実践者である空海の仏教的無常観に基づいた「山」詩のほうが、より一層「山」への指向性が強いことはいうまでもない。

### 3、仕官の苦悶を吐露する道真の「山林」詩

文章経国思想を唱えた勅撰三集の時代から承和期に入ると、摂関政治の進展と文人相軽の横行によって、政治環境が一変して、官界を生きる難しさを痛感した文人官僚たちは「公」から「私」へと関心が移り、詩作もより身近で内面的になってきた。文章博士出身の菅原道真是官僚と詩人の両面性を持ち、右大臣にまで昇進しながら、讒言で大宰府に左遷されるという波乱万丈の人生を送った。次に、道真の「山林」詩を見てみよう。

「苦熱」（『菅家文章』179）

未出炎蒸天地鑪	未だ炎蒸 天地の鑪を出でず
况むや世路甚崎嶇	况むや世路を行きて甚だ崎嶇たらむや
家兒不放山林去	家兒は放さず 山林に去なむことを
苦熱庸材一腐儒	苦熱 庸材 一腐儒

「苦熱」という詩題は、『白氏文集』にも三首見られ、炎熱の苦しみと不遇な官僚生活の苦悶の両方にかけている。「况むや世路を行きて甚だ崎嶇たらむや」と官界の險悪を表した後、山林に去ろうとする心境を述懐している。この「山林」とは、隱逸者の理想境を指す。しかし、家族を持っている道真にとっては、自由自適な隱逸生活は不可能だと嘆くしかなかった。官僚生活の束縛への嫌悪は、「君先罷秩閑多暇。日月煙霞任使令」（「憶諸詩友、兼奉寄前濃州田別駕」263）など、しばしば『菅家文章』の詩作に見られる。実は、この官僚生活に対する心情は、「言我本野夫、誤爲世網牽」（『白氏文集』<sup>13</sup>・閑適三「香峯下新置草堂、即事詠懷、題於石上」303）、「一列朝士籍、遂爲世網拘。高有罣繳憂、下有陷阱虞」（同・閑適四「馬上作」347）など、白樂天の「閑適詩」にも数多く見られる。危険と困難に満ちた官界に身を置いた白樂天は、朝廷で奔走する官僚生活から逃れるために、山林に隱居する志を示しているのである。同じ官僚である道真是、白樂天の詩句「誤爲世網牽」、「遂爲世網拘」に強く共鳴したのであろう。また、『白氏文集』にある「喜入山林初息影、厭趨朝市久勞生」（「重題」976）のように、山林と朝市とを対照的に詠んだ詩句は、「大底秋傷意、山中不勝秋。（中略）指家歸出早。怨作市朝囚」（「秋山」162）など、『菅家文章』にも見られる。

一方、長年の官僚生活への嫌悪・否定とは対照的に、山水池亭への肯定・賛美を詠んだ白詩には、白樂天の「閑適」への志向が強く感じられる。例えば、病気で休暇をとり、北亭に臥せていた時の心情を述べた白詩「北亭臥」（『白氏文集』2197）では、「蓮開有佳色、鶴唳無凡聲。唯此閑寂境、愜我幽獨情」

と詠んでいる。平凡な風景であっても、白樂天の目に映ると絶景に変わる。耐え難いほどの孤独感が、逆に白樂天にとって、一人で安靜の境地を味わう好ましい対象となる。回りの山水風景を「閑寂境」と肯定・賛美することによって、それが自分の精神世界の高潔さに変貌するのである。このような「閑適詩」の影響は、「不爲幽人花不開、万株松下一株梅」（「田家閑適」362）、「曾向簪纓行路難、如今杖策處身安」（「閑適」464）など、『菅家文章』にも表れている。

平安初期漢詩集の「山林」詩の考察から分かるように、山林は都に住む貴族官僚にとっては遊覧、休養の非日常的な場であり、「吏隱兼得」の手段であった。真に官僚生活を否定するのではなく、身近の山荘、別荘を自然風景に見立てることによって、山林隱逸を観念的に味わうのみである。また、苦悶の官僚にとっては、山林は嫌悪する官界から離れた閑寂な境地で、自分の内心を吐露する私的な空間であった。自身の官界の経歴に基づいて、官僚生活を否定し、山林の閑寂に身心の安らぎを求めている。さらに、山寺に住む僧侶にとっては、山林は仏道修行の場であり、また無常な「穢土」からの遁れ先でもあった。「俗塵」を徹底的に否定する一方、山に入る「興」、山中の「樂」を訴え、「入山」即ち仏門に帰すべきことを力説している。そこに、仏教と隱逸の合流が見られる。

### 三、『古今集』における「山里」歌と山林隱逸詩の関わり

仏教思想の隱逸詩への浸透は、すでに六朝時代の謝靈運をはじめ、多くの山林隱逸詩に表れた。特に禪宗の隆盛により、空寂・清幽の禪趣が漂う孟浩然、王維などの詩作が数多く詠まれた。

894年、遣唐使の廃止後、漢文学にかわって仮名文学の隆盛を迎える。十世紀初頭に入り、日本最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が編纂された。仮名序によれば、『古今集』の編纂目的は、唐風文化を遍く取り入れた前代に対して、日本固有の『万葉集』の世界に復帰しようとするものであった。一方、『古今集』が成立する前、菅原道真撰と称される『新撰万葉集』、『大江千里集』など、漢詩の技法を和歌に取り入れるなど、和歌と漢詩の交流による成果がすでに現れていた。漢詩文表現から取り入れた新たな歌材、歌語など、『古今集』自身も漢詩文から多大な影響を受けた。漢詩文という外来文化との融合と反発が同時に行われた『古今集』では、「山」と「里」が結び付いた「山里」歌が次々と現われてくる。

#### 1、『古今集』に詠まれた「山」と「世中」・「都」

『古今集』に至って、「みよし野の山のあなたにやども哉 世のうき時のかくれがにせむ」（雑下・950）、「あしひきの山のまにまにかくれなんうき世中はあるかひもなし」（同・953）のように、「世中」・「都」を離れ「山」に入る歌がようやく現れるようになった。『万葉集』で「常なし」と表現された「世の中」の多用と違い、『古今集』の「世中」の表現特徴は、笹川博司が指摘したように、「世の中」＝「憂きもの」という定型的な観念の形成である<sup>14</sup>。この「憂し」は具体的に何を指すであろうか。

官解けて侍りける時よめる

うき世にはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてにする

（雑下・964・平さだふん）

この一首の詞書で分かるように、都仕えの煩わしさや、政治の不遇が当時の文人官僚の「憂し」の源と言えよう。「世中」を「すみわびぬ」（夏・152）、「あるかひもなし」（雑下・953）と否定的に捉えた彼らが選んだ道は、ほとんど「山のまにまにかくれなん」（同・953）、つまり出家である。「山」は「憂き世中」の「かくれが」（同・950）つまり憂き世からの逃避先として次第に定型化されていく。それは「世をすてて山に入るひとやまにても猶うき時はいづちゆくらん」（同・956）と、この世が厭になったらすぐ出家して山に入るという当時の風潮を皮肉った歌まで出現したことから分かる。一方、「山に入る」という行為への懐疑とも理解できる。「白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ」（同・945）と実際に京都の小野に隠遁した惟高親王の実生活から生まれたとされるこの歌からも、積極的に自ら出家して山に入ったとは読みとれない。「我いほは宮このたつみ しかぞすむ 世をうち山と人はいふなり」（同・983）、つまり「私が世を憂く思って隠遁したと人は言うそうだが、山中の生活は楽しいものだ」と詠んだ喜撰法師のような歌は、『古今集』には稀である。前代の山林隠逸詩「喜入山林初息影、厭趨朝市久勞生」（『白氏文集』「重題」976）や「南山松石看不厭。南岳清流憐不已」（空海「入山興」『経国集』62）に表れた山に入る時の喜びや、山林の景色を賞美する楽しさが『古今集』における「世の中」からの逃れ先と捉えられた「山」には見えてこない。

『古今集』において、「山」は「憂き世の中」からの逃避先として捉えられ、「山」と「世の中」・「都」の対照が一応成り立っており、山林隠逸詩の表現特色を受け継いだと言えよう。が、仏教の厭世観による「世の中」の否定が十分あるものの、「山」への積極的アプローチ、山居生活への讃美はあまり見られない。ここに、歌・詩のずれが生じている。但し、「山」が人間の住む場とし

て認められたことによって、「山」と「里」が結びつくことが可能となり、『古今集』に「山里」歌が登場したのである。次には、『古今集』の「山」を代表する「山里」という文学空間と山林隱逸詩の交流を考察しながら、歌・詩表現のずれが生じた原因を究明してみよう。

## 2. 『古今集』 「山里」 歌の定型化—山林隱逸詩からの変容

『万葉集』には見えず、『古今集』になって表れた8例（詞書1例含む）の「山里」を挙げてみよう。

- ① 春たてど花もにほはぬ山ざとは物うかるねにうぐひすぞなく  
(春上・15・在原棟梁)
- ② みる人もなき山ざとのさくら花 外のちりなん後ぞさかまし  
(春上・68・伊勢)
- ③ ひぐらしのなく山ざとの夕ぐれは 風よりほかにとふ人もなし  
(秋上・205・よみ人しらず)
- ④ 山里は秋こそことにわびしけれ しかのなくねにめをさましつゝ  
(秋上・214・たゞみね)  
宮づかへひさしうつかうまつらで山ざとにこもり侍りけるによめる
- ⑤ 奥山のいはかきもみぢちりぬべし てる日の光みる時なくて  
(秋下・282・藤原關雄)  
冬の哥とてよめる
- ⑥ 山ざとは冬ぞさびしさまさりける 人めも草もかれぬとおもへば  
(冬・315・源宗于朝臣)
- ⑦ しらゆきのふりてつもれる山ざとは すむ人さへや思ひきゆらん  
(冬・328・壬生忠岑)
- ⑧ 山里は物のわびしき事こそあれ 世のうきよりはすみよかりけり  
(雑下・944・よみ人しらず)

①は『新撰万葉集』<sup>15</sup>（卷上春・10）にも見える業平の子・棟梁の歌であり、対応する漢詩は「堯堯幽亭豈識春。不芘絕域又無勻。花貧樹少鶯慵囀。本自山人意未申」という。和歌では、春になっても花が咲かず、ただ鶯がものうい声で鳴くという寂しい「山里」が描かれている。これに対し、漢詩では「不芘絕域」即ち都から離れた辺鄙な地で、「山人」が不如意を嘆く心情を詠じており、歌・詩のずれが見られる。②の伊勢詠もやはり「山里」を人気なく寂しい場所と考えている。『大江千里集』<sup>16</sup>には、

## (11) 落尽閑花不見人

あとたえてしづけき山にさく花のちりはつるまでみる人もなし

とある。句題詩の表現「不見人」に因んだ末句「みる人もなし」は伊勢詠の初句と全く同じである。しかも、「しづけき山」が「山里」と対応し、花が散るのも両方あり、歌材も一致している。おそらく伊勢は千里のこの一首に啓発され、『古今集』の「山里」歌を詠んだかと考えられる。さらに、『大江千里集』の句題原拋詩「柴扉日暮隨風掩 落尽閑花不見人」（『元氏長慶集』卷16・晩春）は『千載佳句』閑居部などに収められ、つまり伊勢の「山里」歌は「閑居」詩の閑寂な雰囲気を間接的に受け入れたと言えよう。しかし、閑寂な雰囲気を楽しむ「閑居」詩の心境と違い、伊勢詠は言外に「そうすれば、大勢の人が山里の花を見に来るだろう」の意を込めており、人気のない「山里」を好ましくないものと捉えている。このような歌・詩のずれは『大江千里集』にも見られる。

## (107) 何獨朝々暮々閑

はかなくていつも我身のひとりしてあしたゆふべにしづかなるらむ

句題原拋詩「風竹松煙晝掩關、意中長似在深山。無人不怪長安住、何獨朝朝暮暮閑」は長安に閑居している様子を詠んだ「長安閑居」（『白氏文集』卷第13・665）という作である。山林、田園など閑静な場所で閑居する隱逸者とは違い、白楽天はにぎやかな都に住みながら閑静な気でいられることを自慢している。一方和歌では、世に時めくことのできない我が身の境遇を嘆き、ひとり朝夕静かに暮らす失意を詠んでいる。静寂さのみを強調し、原拋詩の閑居生活を楽しむ心境が捨象された。

続く③の歌は「ひぐらし」の鳴き声、「夕ぐれ」、「風」「とふ人もなし」など自然の景物を集めて「山里」の秋の寂しさを表出している。『文選』「贈白馬王彪」「秋風発微涼、寒蟬鳴我側」を出典とするという指摘もあるが<sup>17</sup>、私見では、『全唐詩』卷128・王維「早秋山中作」の「草間蛩響臨秋急、山里蟬声薄暮悲。寂寞柴門人不到、空林独与白云期」により近い関係を持っているであろう。詩題「早秋」と歌の部立「秋上」は季節的には一致し、「山里」「蟬声」「薄暮」「人不到」はそれぞれ歌の部分と対応している。蛩・蟬などの音声によって静寂の禅趣をきわだたせる王維詩の技法もそのまま歌に援用された。但し、「寂し」という言葉を表に出さない歌に対し、詩のほうが「悲」「寂寞」を用いて率直に秋の「山中」の寂寥感を詠んでいる。もちろん、漢語「山里」と和語「山里」は関連があるが、意味がまったく同じでないことは言うまでもない<sup>18</sup>。

忠岑詠の④もまた秋のわびしさを歌う作である。この一首は紀長谷雄「山家秋歌」「寂寞山家秋晚暉。門前紅葉掃人稀」と「共に秋の風物の音に寄せて『山居』の寂しさを歌うという共通の発想がみられる」ことは、三木雅博「紀長谷雄の『山家秋歌』をめぐって—白詩享受の一端—」<sup>19</sup>によってすでに指摘されている。⑥の冬歌は「山里」の寂しさを詠む歌の集大成と言えよう。今まで、春、秋の「山里」に住む寂寥・孤独感を吐露する歌が数多く作られたが、作者は間違いなくそれらの歌を念頭に置いたはずである。⑦は深い雪に閉じ込められた人を思う歌である。この「山ざと」に「すむ人」は世をのがれた人を指すであろう。ここで「山里」はまた出家遁世の場所となった。

以上考察してきた「山里」という空間は、いずれも寂しくわびしい場所となっている。寂寥の雰囲気に偏る「山里」の定型化がうかがえる。これは、前述した漢詩文に詠まれた山中の美しい景色とも悠々自適な心情とも隔たりがある。「山里」歌と山林隱逸詩の交流は確認できたが、そのほとんどが「寂寞山家」の静けさ、寂しさを詠む作に限られている。前述した『古今集』における「世の中」からの逃れ先と捉えられた「山」に通ずるように、「喜入山林初息影」（『白氏文集』「重題」976）、「如今杖策處身安」（『菅家文草』「閑適」464）などに表れた喜びや心の安らぎといった部分が捨象されている。三木氏も、紀長谷雄「山家秋歌」では「白氏草堂詩」の「山居の喜び」の面は詠まず、代わりに『古今集』の「山里」を詠んだ和歌と同じ発想による「寂寥感・孤絶感」を持った語句が挿入されたことに注目し、「山里」の持つ「寂寥感・孤絶感」は『万葉集』など以前から形成されてきたものであると述べた。さらに、「山家秋歌」における「白氏草堂詩」の再構成は、和臭とは違う『白氏文集』の「和様化」であると主張した<sup>20</sup>。確かに、『万葉集』における和歌表現の伝統の影響は無視できないが、「さびし」「わびし」が直接「山」の修飾語として詠まれ歌は、『万葉集』にも『古今集』にも、管見の範囲では見当たらない。『古今集』「山里」歌になってはじめて、「山里」が「さびし」「わびし」と詠まれたのである。そこに、「山里」は歌詩交流によって、普通の固有名詞「山」に比べ、新しい認識が付与され、『大江千里集』の漢詩一句と和歌一首の題詠という限定された表現様式によって、歌に包容しきれない部分が捨象され、寂寥の部分のみを凝縮して、「山里」という新たな文学空間が構築し定型化されたのではないだろうか。

さらに、⑤の東山進士と号される藤原関雄詠の詞書にあるように、長い間宮廷への出仕をしないで山里に引きこもっていた時に詠んだ歌を見てみる。山中の美観への愛情を詠じているようであるが、暗に「日の光」を「天皇」に、「紅葉」を自分にたとえて、政治の不遇を訴えている。『大江千里集』「述懷」にも

「あまぐもや身をかくすらん日のひかりわが身てらせどみるよしもなき」と似たような不遇を訴える歌が見られる。また、宮廷と「山里」とを対照的に捉え、山中に入り、自然風景を賞美する趣向は、今まで考察した山林隠逸詩と一致する。ここで、特に注目すべきなのは⑧の伝小町詠である。「山里は、寂しくてつらいことはつらいけれども、世間のいやなのよりは住みよかったなあ」と、世を捨てて山里に住むようになった者の実感を述べた歌である。前半の「山里」に住むわびしい気持ちは今までの「山里」歌とさほど違いがないが、後半の憂き世より住みよかったという部分は、「山里」が住みにくくわびしいところだろうという常識から一步踏み出し、「山里」を住む場としてより肯定的に捉えている。故に、この歌の誕生によって、「山里」が「憂き世」と対照的に詠まれ、「山里」と人間の距離がさらに近付いてきたと言えよう。このような憂き世への否定によって、「山」への指向性が強まった「山里」歌は、時代がさほど離れていない空海が仏教的無常観に基づいて詠んだ一連の「山」詩とかかわりがあるのではないかと思われる。

『古今集』において、「山里」と「世」が共に詠まれた歌はこの一首のみであり、「山里」という空間は厭世的哀愁が漂う「寂寥・孤絶」の地としか捉えられていないが、歌詩交流と仏教思想の隆盛といった当時の文学・思想の動向を如実に反映している。

## おわりに

本稿では、中国山林隠逸詩という外来文学表現の受容の視点から、『懐風藻』山林隠逸詩から『古今集』「山里」歌に至る過程を辿り、時代ごとに、山林隠逸詩表現の日本文学への浸透度の差異を分析し、さらに『古今集』「山里」歌と山林隠逸詩の異同を検証してみた。漢詩の面では、「世俗」と「山林」との止揚という中国隠逸詩の表現特色はいち早く『懐風藻』に受け入れられたが、この時期の受容は表現借用にとどまり、詩作の個性が見られなかった。平安時代に入ると、山林隠逸詩の浸透が深まるにしたがい、詠み手の身分、階層による「山林」詩表現の分化が見られ、「吏隠」の場とされる王臣貴族の「山林」詩、官界から離れた閑寂な境地とされる苦悶の官僚詩人道真の「山林」詩が現れた。中には、山林隠逸詩の表現借用にとどまらず、仏教思想を導入するために山林隠逸詩を再構築した空海の「山」詩もある。一方、和歌の面では、『万葉集』に詠まれた「山」は「世俗」ではなく、人間の住む「里」と対照的に捉えた異界的存在であり、『万葉集』において「世の中」を離れ「山」に通れる



歌はまだ現れず、同時代の漢詩文のような山林隱逸詩表現の受容は直ちには見られなかった。歌詩交流と仏教思想が盛んになるなかで成立した『古今集』に至ると、「世中」・「都」を離れ「山」に入る「山里」歌がようやく現れたものの、白楽天の閑適詩などに詠まれた山居の喜びや心の安らぎを捨象し、王維の禪詩などに詠まれた空寂・清幽の要素を大いに取り入れた寂しくわびしい「山里」の定型化がうかがえる。そこに、山林隱逸詩からの変容が見られる。

山林隱逸詩という外来文学表現の受容において、同時代の和歌のほうは常に漢詩より遅れている。漢語という外国語で書かれた漢詩は中国漢詩文の表現に制約され、作詩の初段階では模倣するしかないため、山林隱逸詩の表現が直ちに受容できたものの、自国の言葉で書かれた和歌には固有の文学的伝統があり、漢詩表現の借用なしで成り立つので、このように歌・詩の時差が生じたと考えられる。「山里」を山林隱逸詩のように好ましい美観として捉えるには、さらなる歌詩交流の深まる後代を待たなければならない。

## 注

- 1 笹川博司『深山の思想—平安和歌論考—』和泉書院、1998年4月。
- 2 家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」（1997年11月岩波書店『家永三郎集』第一集）、106-107頁。
- 3 小島孝之「『山里』の系譜」（『国語と国文学』1995年12月号）。
- 4 ここで、世俗と対照的にとらえられた山水自然に託して、隱逸の趣向を表す詩を「山林隱逸詩」という。世俗と対照的な「山水」、「山中」、「山」などの言葉は、すべて「山林隱逸詩」の「山林」に含まれる。
- 5 『文選』の原文は、内田泉之助等著『文選（詩篇）上』（新釈漢文大系14、明治書院1963年）による。
- 6 本稿『芸文類聚』の原文は、歐陽詢撰、汪紹楹校『芸文類聚』（中華書局、1965年）による。
- 7 以下作品の引用本文は特に注記しない限りは岩波書店『日本古典文学大系』による。
- 8 金星和歌子「万葉集の「山」、「愛文」第25号、1990年1月、愛媛大学法文学部国語国文学研究会。
- 9 「み山」「山高み」について笹川博司「『山高み』から『山深み』へ——古今集「み山」歌考——」（『王朝文学研究誌』1、1992年9月）に詳しい。
- 10 波戸岡旭「空海の詩文と宮廷漢詩」（『日本学』19、1992年6月）、山岳修

行僧を述べた部分に参照。

- 11 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（中）、1828頁。
- 12 小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（日本古典文学大系69）、岩波書店、1988年第20刷、23頁。
- 13 本稿『白氏文集』の原文は、特に注がない場合は、すべて岡村繁著『白氏文集』（新釈漢文大系、明治書院）による。
- 14 笹川氏前掲書「『世の中』と遁世」の一節に参照。
- 15 『新撰万葉集』の本文は、新聞一美等編集『新撰万葉集注釈』（和泉書店、2005年）による。
- 16 『大江千里集』の本文は、平野由紀子・千里集輪読会著『千里集全釈 私家集全釈叢書36』（風間書房、2007年）による。
- 17 小島憲之等校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店、1989年）注による。
- 18 単に「山の中」を意味する漢語「山里」に対し、固有名詞として使われる「山里」について、『角川古語大辞典』では「山中にある里。山村。中古の物語などでは、平安京の周辺の地、小野・嵯峨・桂・宇治などをいい、隠棲または別荘の地とされた」と解釈している。
- 19 三木雅博「紀長谷雄の『山家秋歌』をめぐって—白詩享受の一端—」、「中古文学」(23) 昭和54年4月。
- 20 三木氏前掲注19論文、9頁。